（前ページからの続き）

セノグラフ（Scenograph）を名付けたスポボダや、クレイグ、日本では伊藤喜朗も舞台美術のなかに照明等も含む概念を認めていましたが、照明（LightingWG）は既に独立してありますので、あえてスペース・デザイン（Space DesignWG）と改称して、舞台装置とともに映像の概念を含ませたと考えられます。より厳密に専門化を図ると同時に、映像を加えることで新たな時代に対応しようとの試みではないでしょうか。

今後、舞台に関わらず、映像関係の利用度は舞台美術に大きな影響を与えるでしょうし、無視することはできない時代になったと思われます。であれば、舞台芸術創造における映像の役割を舞台装置とともに芸術的に高めていく努力、研鑽が、OISTAT日本センターにおいても益々必要になることと考えられます。

事務局 Letter

■"2015年度通常総会開催"■

◆ 日本センターの2015年度通常総会を7月16日（木）日本センター事務所会議室（千駄ヶ谷）において開催いたしました。20名の会員（委任状提出者を含む）の出席の下に2014年度事業報告及び収支決算報告、並びに2015年度事業計画案及び収支予算案の審議を行い、いずれも原案通り承認されました。また2015年度からの役員役物については全員引き続き留任となりました。

◆ 総会後、8月に國吉前事務局長が退任、当座、小川幹雄副会長が業務いたします。

◆ OISTATヘッドクウォーターズ（本部）は、2020年まで台湾に置かれることが決定。

◆ 次回ワールド・ステージ・デザイン「WSD2017」は、2017年7月1日～9日、台北にて開催されます。

以上

OISTAT 日本センター副会長　小川 幹雄

■ OISTAT（劇場芸術国際組織）日本センター ■

URL:http://www.oistat.jp/

TEL&FAX:03-5401-3430 / 〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷4-13-4-1F

oistat

OISTAT 劇場芸術国際組織
日本センター NEWS
2015. November vol.13

ORGANISATION INTERNATIONALE DES SCENOGRAPHES, TECHNICIENS ET ARCHITECTES DE THEATRE
OISTAT 劇場芸術国際組織は、舞台美術家、劇場技術家、劇場建築家の国際組織です

PQ2015 展示会場風景（アメリカのブース）

（クロスロード・アン教会受入口（日本ブースのBG企画）　日本ブースのパフォーマンス風景　舞台模型と映像　参加各国の企画（エストニア）　OISTAToday会場 各国のパフォーマンス　Around Table会議（各国代表の会議）

PQ（プラハカドリエンナーレ）に参加して

／OISTAT 日本センター会長　高田 一郎

1967年以来4年に1度、チェコのプラハで開催される舞台美術の世界的な大祭典会が今年も、2015年、PQ2015として盛大に展開された。それに連行して、OISTATの各委員会が開催され、日本からは小川幹雄、伊東正示、高田一郎の3名が参加した。

PQ展の会場は、2007年までは産業宮殿という歴史的な建物を中心とした展示で一応のまとまりを見せていたが、2008年情しても消失。今回はプラハ旧市街、点々とした各所で展開することになった。内容も舞台模型やデザイン画の展示を主体としたものから、インスタレーション、パフォーマンスなどの空間的な表現で各国が競う事に変化してきた。日本もプラハ・クロスロード アン教会という古い建造物の中で、日本独自の雰囲気のパフォーマンスが、日本舞台美術家協会の参加で印象的な効果を上げた。

会議の方は、パフォーマンス・デザイン会議などに出席したが、世界各国から集った、志を同じくするデザイナー連中が一堂に会し、話し合うというだけでも、一種の連帯感が生じ、舞台芸術の明るい未来を感じさせた。

デザイナー同志の交流の場は建日、さまざまな場所であったが、特に台湾のグループによる、2017年WSD台湾のデモンストレーションのパーティーは注目され、台湾の事務局との密接な話し合いの場を持つことができたのは意義があったと思う。

時代の流れとともに、舞台空間に対する思考、表現方法は変化して行く。その世界の状況を如何に把握し伝達していくか。OISTAT日本センターの責任を重々と感じたPQ2015であった。

OISTAT・PQ2015報告と新たな組織編成について

／OISTAT 日本センター副会長　小川 幹雄

2015年6月、四年に一度、チェコのプラハで開催される舞台美術を中心としたPQ（プラハ・カドリエンナーレ）2015が開催されました。プラハの街の此処彼処に会場が設けられ、世界中の国々から寄せられた展示やパフォーマンスが行われました。

かつては、舞台美術の模型や図面が展示される形態が主でしたが、最近はパフォーマンスが取り入れられて動きや変化を伴い表現されることが多くなりました。日本舞台美術家協会のブースでもブルガリアとレバノンに挟まれた狭い空間で、墨書や模吹雪などを使い、若手の舞台美術家たちが自ら演じるパフォーマンスを繰り広げました。合間には映像で日本の伝統芸能を投影する工夫も見られました。

今やこの映像が、舞台美術にとっては欠かせない要素であるらしく、殆どの国のブースで映像が使われていました。なかには映像が舞台美術として扱われているものもあります。この傾向を見ると半世紀にわたるOISTATの歴史の上で、新しい時代を迎えた感があります。

PQに合わせて開催されたOISTAT本部の各委員会の組織編成においても、新たな時代に適応させるような改変がありました。一年前の2013年秋に英国カーディフで開催された本部委員会で、当初からOISTATの柱の役割を果たしてきた舞台美術委員会（セノグラフ（Scenograph）委員会）がパフォーマンス・デザイン（Performance Design）委員会と改称され、舞台美術はその下に在った照明ワーキング・グループ（LightingWG）、音響（SoundWG）、衣装（CostumeWG）と同列に並び、また、名称は Scenograph から Space Design に改称されて、Space DesignWG となりました。

（次ページへ続く）